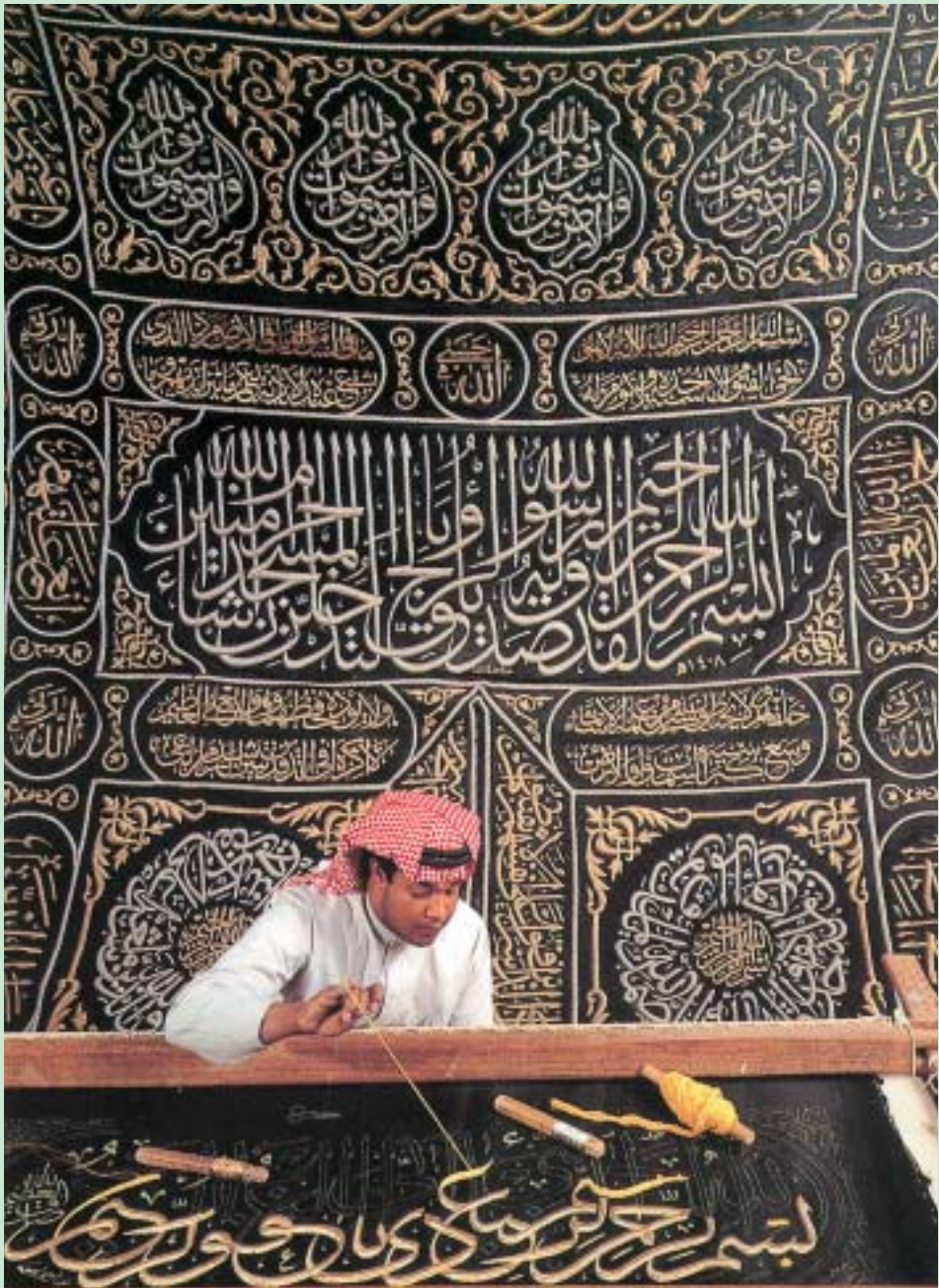


第1章 風土と宗教



マッカのカアバ聖殿を覆う布地（キスワ）にクルアーンの言葉を金糸で刺繍するサウディ人

1 国土と人口

(1) 国土

サウディアラビア王国は、世界最大の半島であるアラビア半島の大部分（約85%）を占めている大国である。この広大な国土は北緯16度から32度、東経36度から56度に位置しており、面積は日本の約5.7倍に相当する214万9,690平方キロメートルである。北はヨルダンとイラク、東北はクウェイト、東はアラビア湾、カタール、アラブ首長国連邦、南はオマーンとイエメンに、そして西方は紅海に接している。アラビア湾に面する海岸線の長さは約500キロメートル、紅海側の海岸線の長さは約1,750キロメートルに及んでおり、また、アラビア湾の都市ダンマームから中央部の首都リヤードを経て紅海岸の都市ジェッダまでの距離は約1,400キロメートルに達している。

サウディアラビアは地理的に次の4つの地域に分けることができる。中央部のナジド、ハサーを中心とした東部地域、北西部のヒジャーズ、そして、南西部のアシールである。

首都リヤードの位置する中央部のナジド（高地という意味）は広大な高原地帯で、リヤード付近の標高は約600メートルあり、ナジドの最高地点はリヤード南西に聳え立つ標高1,000メートルのジャバル・トワイク（トワイク山）である。リ



アシール山岳地帯

ヤード近郊にはオアシスが点在し、地下水が豊富なため農業が盛んに行われている。また、リヤードから北西およそ20キロメートルの地点に、サ우드王家発祥の地であるディルイーヤの町がある。

東部地域にはハサー（水のある砂地帯という意味）と称される平野がアラビア湾岸に幅およそ160キロメートルにわたって広がっている。この地域は豊富な水量を誇る国内最大のオアシス地帯であり、農業の中心地の一つとなっている。また、アラビア湾沿岸部から沖合一帯は、世界の原油確認埋蔵量の4分の1が存在する、世界最大の油田地帯としてつとに有名である。

紅海側には、アカバ湾から南へ約1,400キロメートル続く細長い丘陵・山岳地帯があり、この一帯がヒジャーズと呼ばれている。ヒジャーズとは「障壁」という意味で、容易に越すことのできない険しい山岳地帯からそのように名づけられたものである。ヒジャーズの西方にはティハーマと称される幅の狭い砂地の平原が紅海岸に沿って横たわっている。

ヒジャーズ地方からさらに南下しイエメン国境まで続く地域はアシール（困難な地方）と呼ばれており、ヒジャーズ同様急峻な山脈が連なっている。アシール一帯は降雨量が多いため、国内有数の農業地帯となっている。



ルブ・アルハーリー砂漠

ヒジャーズ、アシール両地方の山岳地帯の標高は1,000メートルから3,000メートル以上に達しているため、ヒジャーズのターイフやアシールのアブハーなどの山岳都市が避暑地として発展している。国内最高峰は標高3,133メートルのジャバル・サウダ（サウダ山）である。

日本の約5.7倍という広大な国ではあるが、国土の3分の1は不毛の砂漠地帯であり、なかでも中央部のナジドには大砂漠が3つある。ナジド南部には国内最大で、世界でも最大級のルブ・アルハーリー（Empty Quarter；空白の四半分）砂漠、北部には国内2番目の大きさで赤い砂丘で有名なナフード砂漠、そして東部には南北1,300キロメートルに延び、北端はナフード砂漠に、南端はルブ・アルハーリー砂漠に繋がっているダフナ砂漠が広がっている。約65万平方キロメートルの面積を持つルブ・アルハーリー砂漠は10年に1度しか雨が降らない、世界で最も乾燥した地域の一つであり、過去18年間にわたり一滴の雨も降っていない場所もあると言われている。

(2) 人 口

従来、サウディアラビアの人口は、生来のサウディアラビア人のほかに、奴隷として同国に連れてこられた黒人の子孫やアフリカからの移民の子孫、それにイスラーム諸国から巡礼としてマッカ（メッカ）やマディーナ（メディナ）を訪れ、そのまま居ついた者の子孫、さらにアラブ諸国からの労働移住民などによって構成されていた。1970年以降、潤沢な石油収入の追い風を受け、国家が経済発展の





道を歩み始めるとともに、外国人労働者が急速に国内に流入し、さらに、経済発展の恩恵を受けた国民の出生率も急激に上昇したため、国内人口は増加の一途を辿った。

1974年、サウジアラビアで初の国勢調査が実施されたが、これ以前の人口は定かではなく、最低は300万人から最高は800万人と、かなり幅のある人口推計がなされていた。この第1回国勢調査の結果は、総人口が701万2,642人（定住者512万8,655人、遊牧民188万3,987人）、主要地域の人口はマッカ州が175万4,108人、リヤード州が127万2,275人、東部州が76万9,648人で、これら3地域で総人口の半数以上を占めていた。また、主要都市の人口は首都リヤードが66万6,840人、ジェッダ56万1,104人、マッカ36万6,801人、ダンマーム12万7,844人であった。なお、サウジアラビア人と在留外国人の内訳は公表されなかったため、サウジアラビア国民の実数は不明であったが、400万人前後ではないかと推測されていた。

1992年に第2回国勢調査が行われ、その第一次結果が同年12月18付のサウジアラビア政府官報に掲載された。それによれば、同国の総人口は在留外国人を含め1,692万9,294人で、第1回国勢調査時の701万人から18年間で約2.4倍に増加している。内訳は、サウジアラビア国民が1,230万4,835人（全人口の72.7%；男性621万1,213人、女性609万3,622人）、非サウジアラビア人が462万4,459人（全人口の27.3%；男性325万5,328人、女性136万9,131人）である。

その後、国勢調査は実施されていないが、同国の経済・企画省発表の資料によ

れば、2000年の総人口は2,084万6,884人、内サウディ国民は1,558万8,805人（全人口の74.8%；男性780万51人、女性778万8,754人）、外国人は525万8,079人（全人口の25.2%；男性351万4,915人、女性174万3,164人）となっている。また、サウディ国籍の年齢層別人口構成比率は、0歳～14歳が45.3%、15歳～29歳が27.4%、30歳～44歳が14.9%、45歳～59歳が7.3%、60歳～74歳が3.7%、75歳以上が1.4%で、14歳以下の年齢層が全体の半数近くを占めており、29歳以下だと70%を超えている。青少年の人口がいかに急増しているかがよくわかるだろう。

1999年時点の人口増加率などは次の通りである；（1）人口増加率：3.39%、（2）出生率：3.78%、（3）死亡率：1,000人に対し4.86人、（4）乳児死亡率：1,000人に対し38.8人、（5）平均寿命：70.55歳（男性68.67歳、女性72.53歳）（6）出産率：女性一人当たり6.34人。

サウディアラビア人年齢層別人口構成（2000年）

年 齢	男 性	女 性	合 計	構成比(%)
1歳未満	248,219	231,418	479,637	3.1
1 - 4	1,050,557	1,015,755	2,066,312	13.3
5 - 9	1,254,647	1,200,347	2,454,994	15.7
10 - 14	1,040,984	1,010,497	2,051,481	13.2
15 - 19	876,047	865,785	1,741,832	11.2
20 - 24	663,493	729,856	1,393,349	8.9
25 - 29	530,569	597,698	1,128,267	7.2
30 - 34	451,681	476,359	928,040	6.0
35 - 39	378,656	391,184	769,840	4.9
40 - 44	312,060	318,590	630,650	4.1
45 - 49	238,102	244,900	483,002	3.1
50 - 54	179,181	187,801	366,982	2.4
55 - 59	139,234	151,546	290,780	1.8
60 - 64	103,332	121,641	224,973	1.4
65 - 69	112,429	79,482	191,911	1.2
70 - 74	91,227	73,704	164,931	1.1
75 - 79	54,762	36,780	91,542	0.6
80 - 84	36,747	27,105	63,852	0.4
85歳以上	38,124	28,306	66,430	0.4
合 計	388,687	397,323	786,010	100.0

（出所：経済・企画省）

2 気 候

国土が広い地域によって気候にかなり相違があり、また、日本のような明確な四季はない。あえて1年を四季に分けるとすれば、3月から4月中旬が春、4月中旬から9月が夏、10月から11月が秋、12月から2月が冬となる。

紅海に面している西部地方は、亜熱帯性気候である。たとえば紅海岸の都市ジェッダは一年中高温多湿で蒸し暑い日が続き、冬期でもクーラーを必要とする日がある。

アラビア湾岸のダハラーンを中心とする東部地域の気候は、夏期は高温多湿となるが、冬期は気温、湿度とも下がり、過ごしやすい気候となる。冬期の最低気温は10度を下回ることもあるため、ヒーターが必要となる日もある。

一方、内陸地方は高温乾燥気候で、日中と夜間の温度差が大きいのが特徴である。夏期の日中温度は連日40度を超える猛暑となるが、日没とともに気温はかなり下がるため、夜はしのぎやすくなる。冬期は朝晩かなり冷え込み、時には最低気温が零度以下になるため、首都リヤドでも冬期はヒーターが必要となる。



4月に満開になるバラは香水等に使用（ターイフ）

ヒジャーズおよびアシル地方の高山地帯は夏期でも涼しいため避暑地として最適な地域となっている。ジェッダから東へ約160キロメートルのターイフは海拔が約1,800メートルあり、国内で最も有名な避暑地として知られている。



慈雨で潤った砂漠に咲く花

10月から3月にかけての比較的涼しい時期に降雨が見られる。国内各地の年間降雨量は地域によって異なるが、平均で

100ミリ前後と極めて少ない。しかし、局地的な集中豪雨がしばしば発生し、リヤードやジェッダなどの大都会がこの豪雨に襲われると、道路がいたるところで冠水し、停電が起き、電話も不通になるなど、都市機能が一時的に麻痺することさえある。

主要3都市の月間平均気温

単位：

	リヤード		ジェッダ		ダハラーン	
	最低	最高	最低	最高	最低	最高
1 月	8	20	19	29	15	26
2 月	10	23	19	29	11	23
3 月	14	28	21	31	15	26
4 月	19	32	22	33	19	31
5 月	24	38	25	35	24	37
6 月	26	42	25	36	27	41
7 月	27	43	27	38	25	42
8 月	22	42	28	37	27	41
9 月	23	40	26	36	25	39
10 月	18	34	24	35	20	35
11 月	16	30	22	33	19	31
12 月	9	22	20	30	13	23

3 宗教(イスラーム)

イスラームとは、預言者ムハンマドが唯一の神アッラーから啓示を受け、世界に広めた宗教であり、「アッラーに身を委ねる、帰依する」という意味である。

サウディアラビアは、世界三大宗教の一つであるイスラームの発祥地、マッカとマディーナの二大聖地を擁するイスラーム国家である。マッカには全世界のムスリムが巡礼に訪れる「聖モスク」があり、また、預言者ムハンマドの終焉の地であるマディーナには、「預言者モスク」がある。これらイスラームの二大聖地と二聖モスクを守護するサウディアラビアは当然のことながらイスラームを国教としており、イスラームの聖典クルアーン(コーラン)とスンナ(預言者ムハンマドの言行)を国の憲法と定めている。

イスラームにはいくつかの宗派があり、最大のものスニー派で、少数派のなかの主要宗派がシーア派である。サウディアラビア国民はすべてイスラームを信奉するムスリム(イスラーム教徒)で、少数のシーア派教徒を除き、彼らのほとんどはスニー派に属している。サウード家一族をはじめ、サウディアラビアの国民は1日5回の礼拝や年に1度の1カ月間の断食を行うなど、イスラームの教義に基づいた生活を送っている。イスラームがサウディアラビア国民のありとあらゆる日常生活の規範となっているため、イスラームの知識なくしては、サウディアラビア王国とその国民を真に理解することは不可能である。以下、預言者ムハンマドの生涯とイスラームについて概説する。

(1) 預言者ムハンマドの生涯

ムハンマドは西暦570年頃、アラビア半島の商業と信仰の中心都市マッカで産声を上げた。クライシュ族に属するハーシム家の貧しい家庭に生まれたムハンマドは幼くして両親と死に別れ、伯父のアブータリブに養育されて、シリアなど近辺地域との取引に従事する商人として育った。聡明で優しいムハンマドは人々から慕われ、アミーナ(正直者)と呼ばれていた。彼は25歳の頃、初めて隊商の責任者となり、年上の寡婦ハディージャの取引の仕事を引き受けた。ハディージャは商都マッカを支配していたクライシュ族の中の富豪で、夫と死別して多くの財産を所有しており、マッカでは名の知られた婦人であった。ハディージャはム

ハンマドの非凡さに驚かされる一方、彼が人間の最高の徳目の一つである誠実さと気品を備えていることに気付き、この青年と以後の運命を共にすることを誓った。

彼女は40歳になっており、当時のアラビアではすでに老境に入っていたが、敬愛しあった2人はお互いの立場と年齢の差を越えて結婚した。こうしてムハンマドは幸せな家庭生活を送っていたが、壮年期に近づくにつれ、宗教的思索に浸るようになった。そして、西暦610年頃のある日、マッカ郊外にあるヒーラの岩山の洞窟で瞑想にふけていたとき、天使ジブリール（ガブリエル）を通して、万物の創造主アッラーから啓示を授けられ、その日から彼はアッラーの言葉を人々に伝える預言者としての道を歩み始めたのである。

当時のマッカは偶像崇拜がはびこる多神教徒の社会だったため、唯一の神アッラーへの信仰を説くムハンマドは数々の妨害や迫害を受けた。マッカでの布教が非常に困難となり、身の危険も迫ってきたため、ムハンマドは西暦622年にマッカ北方約420キロメートルの町マディーナに逃れた。マディーナで布教体制を整えたムハンマドはイスラームを奉じる人々を結集し、マッカの多神教徒の勢力を打ち破り、後年、マッカに無血入城したのである。彼はかつての迫害者達を許し、預言者イブラーヒーム（アブラハム）が創造主を祈るために建てたと伝えられるカバ聖殿から全ての偶像を一掃した。その後、ムハンマドはイスラームの布教活動を近隣地域にまで広げ、アッラーへの帰依を人々に呼びかけた。アッラーの命に従いイスラーム布教の基礎固めを完了したムハンマドは、西暦632年6月8日、マディーナの地においてその生涯を終えた。

イスラームの教えは、アラビア半島からまずメソポタミア、シリアに広がり、さらに北アフリカを経てイベリア半島に浸透し、東はインドから東南アジア、中国にまで達している。現在、ムスリムは全世界で10数億人を数えており、その数は今も増え続けている。

(2) 六信五行

アッラーはムスリムに対し、「六信五行」の義務を課している。六信とは、アッラー、天使、啓典、預言者、来世、定命、を信じることであり、

五行とは、 信仰の告白、 礼拝、 断食、 喜捨、 巡礼、 を行うことである。
以下、六信五行について概説する。

六 信

アッラー

アッラーとは万物の創造主のことをいい、唯一無比であり、永生者、自存者であり、万物に対し主権を有する。アッラーの存在は永遠であり、始めも終わりもない絶対者である。アッラーこそ人類が仕える唯一の崇拜対象者であり、他の者はすべて彼の被創造物にほかならない。

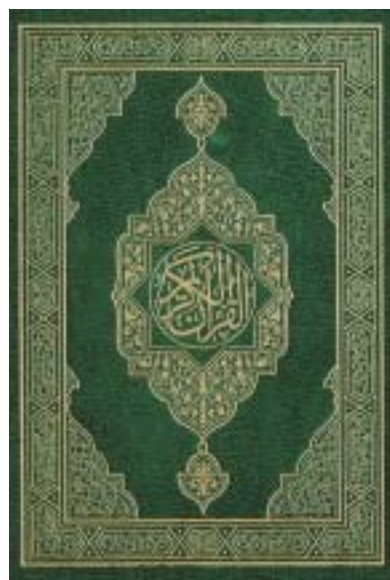
従って、人間が勝手にアッラーのイメージを描くことは間違っており、如何なる偶像をも崇拜してはならないのである。また、罪を犯し、アッラーの教えに背いた者でも、悔い改め、アッラーに許しを乞えば、アッラーはその者に正しき道に立ち返る機会を与える慈悲深き神でもある。ムスリムは常にアッラーを意識して行動し、来世への希望と善行に対するアッラーの報奨を求めて生きているのである。

天 使

天使もまたアッラーの被創造物であり、アッラーのおそばに仕え、アッラーのみの命によって働くものである。天使の中には預言者ムハンマドにアッラーの啓示を伝えたジブリール、この世の終末の日にラッパを吹き鳴らす役目のイスラフイル、死者の魂を肉体から取り出す役目のイズラーイールなど、それぞれの任務や働きを持つ多くの天使がいる。

啓 典

アッラーはムハンマド以前の預言者にも啓示（啓典）を与えている。啓示の中にはムーサー（モーゼ）に与えられた「タラウ



聖クルアーン

ート（旧約聖書のモーゼの五書、ヘブライ語）」やダーウード（ダビデ）に与えられた「ザブール（詩篇、アラム語）」、イーサー（イエス）に与えられた

「インジール（福音書、ギリシャ語）」などがあり、このほかにも最初の預言者と
いわれるアダム（アダム）やイドリース、アブラハムなどにも多くの啓典が授
けられていると言われている。しかしながら、これら啓典のすべてが完全な形で
今日まで残っているわけではなく、時の流れとともに、あるものは言語そのもの
が時代の彼方に取り残されてしまった。このような背景をもって、アッラーが最
後の預言者としてムハンマドを選び、すべての啓典を統括し、最後の啓典として
アラビア語で彼に降されたのが、「クルアーン」である。このような意味において、
諸啓典の中でも聖クルアーンが最も重要な位置を占めていることは言うまでも
ない。

預言者

アッラーは遠い過去の時代から、何時でもどこでも、必要と認めた場合には民
族の中から一人の人間を預言者として選び、啓示を与えてこれをその民族に伝え
ることを命じられた。これまでに遣わされた預言者は、アダム、イドリース、
ヌーフ（ノア）、イーサーなど数多いが、最後の預言者として、最終で完全な啓
典クルアーンを授かったのがムハンマドである。

来世

この世での生活は極めて限定された期間であるのに対し、来世は永遠である。
しかもこの世の功罪が来世に直結し、アッラーの教えに忠実に従い、誠実に生き
てきた者が天国での生活を約束されると言われている。一方、アッラーを信じず、
不誠実に生きた者には地獄の火焰が待っているのである。預言者ムハンマドに降
された啓示は、最も表現力に富むアラビア語によって伝えられ、天国と地獄の様
子を詳しく述べて、人間に警告している。これはこの世で生きるものすべてを、
正しき道に導こうとするアッラーの慈愛と公正にあふれた教えであり、来世のあ
ることを信じ、忘れず、毎日を善意と寛容をもって生きることを説いているので
ある。

定命

森羅万象ことごとく、その動きはアッラーの偉大な意思に基づくものであり、
また、自然界と人間との様々な関わりのすべてもアッラーによって定められたも
のである。定命を信じるということは、すなわちアッラーによってもたらされた

ものを信じ、人間本来の責任を果たし、自己の人生の目標を目指して生きよう
説いているのである。

五 行

信仰の告白

これは、「われはアッラーのほかには神なきことを証言する。そして、われはム
ハンマドがアッラーの使徒であることを証言する」と告白することであり、この
短い言葉の中に、イスラーム神学のすべてが内包されているのである。ムスリム
は入信する時、聖地マッカに入る時、病気になって心の平安を求める時、1日5回
の礼拝を告げる呼びかけの時は言うまでもなく、日々の生活の中で、何時でもど
こでも必要に応じて、この言葉を明確に告白する。何人もイスラームの導くところ
を理解し、アッラーに帰依することを決意した時は、証人たちの前で、この言
葉を告白しなければならない。この告白をできない者はムスリムではないのであ
る。

礼 拝

礼拝は世界中のどの地域においても必ずマッカに向かい、ファジル（日の出前
の礼拝）、ズフル（正午の礼拝）、アスル（午後の礼拝）、マグリブ（日没後の礼
拝）、イシャー（夜の礼拝）の1日5回の礼拝を行うことが義務付けられている。
礼拝時には、必ず身体を清水で洗い清めることを怠ってはならない。

礼拝は常にアッラーを忘れることなく、ムスリムとしての自覚のもとに、日々
の生活に誠を忘れず、非道徳的行為を避けて生きるための祈りであり、現世にお
ける自己の商行為の利益やその他欲望の達成を願って行う祈りとは根本的に異な
るものである。

喜 捨

喜捨のことをアラビア語で「ザカート」という。ザカートはアッラーの名の下
に喜びをもって差し出すのであり、自己の名誉欲や売名のために行ったりしては
ならず、また、喜捨によるいかなる見返りも期待してはならない。

ザカートとは別に「サダカ」と呼ぶ喜捨がある。ザカートはムスリムの所得
（余剰）税として制度化され、納税義務があるのに対し、サダカはあくまでも随
意の救済慈善行為であり、義務とはされていない。

断食

イスラーム暦（太陰暦）の第9月は、「ラマダーン」と呼ばれ、すべての成人ムスリムはこの1カ月間、「サウム（断食）」を行わねばならない。しかし、病臥中の者や旅行者、妊婦、授乳中の女子、老人などはこの月に必ずしも断食をする必要はなく、後の日に同じ日数を断食すればよい。ただし、後の日といえども、高齢者やその他特殊な事由のある者は貧者救済の行為でこれに代わり得ることになっている。

ラマダーン月は他の月と比べ一年中で最も聖なる月とされている。その理由は、この月にアッラーからの最初の啓示が天使ジブリールを通じムハンマドに伝えられた、と言われているからである。

ムスリムはアッラーの命令を至上のものとしてサウムを遂行する。それはアッラーとの最後の審判を信じているからである。一方、このような苦しい義務を厳守することにより、空腹を余儀なくさせられている不幸な人々の苦しみを身をもって味わうことができ、善行への道を悟ることができる。さらに、予想もしない天災などによる飢餓に遭遇した際に、十分に対応できる経験もいつしか身に付くのである。

巡礼

ムスリムは一生に一度、聖地マッカへ巡礼（ハッジ）することを義務付けられている。この巡礼はムスリムの信仰の強化・確立を目的とした五行の中で、最も厳しいものであり、イスラーム暦の第12月（巡礼月；ズ・ル・ヒッジヤ）に行われる。巡礼に参加するムスリムには一定の資格と条件があり、また、巡礼中の数々の聖儀も定められた通りに行わねばならない。

まず、資格と条件であるが、巡礼を行うムスリムは成人で、身心ともに健全な者でなくてはならず、さらに、巡礼に必要な旅費を有し、本人が不在中も家族の生活が安定していなければならない。

次に聖儀であるが、イスラーム暦第12月8日にマッカを出発して、9日は北方のアラファートの地に到り、12日または13日にマッカに帰るまでの間に、定められた儀式を行う。

すべての巡礼者は8日にマッカの北方ミナーに移動して一夜を過ごし、9日の夜

明けと同時にアラファートに向かう。アラファートはマッカの北約25キロメートルの谷あいの平原で、100万人を超える巡礼者を一度に集められる広さを有している。9日昼、巡礼者はこの地に立ってアッラーへの祈りを捧げる。ここでは巡礼者の集会が開かれ、正午と午後の礼拝が同時に行われる。巡礼者は日没とともにムズダリファに向かい、そこで一夜を過ごす。アラファートでの儀式を「ウクーフ」といい、巡礼の眼目とされている。

10日の朝、巡礼者はミナーの谷に戻り、アカバの石柱と呼ばれる石の柱に7個の小石を投げつける儀式を行った後、家畜を犠牲に捧げる。これは、アッラーの試練として預言者イブラーヒームが息子イスマーイール(イシュマイル)を犠牲に捧げるよう命じられ、その命を忠実に実行しようとしたことにより、これを赦さ



アラファートの地に集った巡礼者



祈る巡礼者

れ代わりに羊を犠牲に捧げたという故事に由来する。投石の儀式も、この時にアッラーの命に叛くよう唆した悪魔に石を投げつけて追い払ったイブラーヒームの行為に倣うものである。

この後、髪の毛を剃るか一部を切って、マッカに戻り、カーバ聖殿の周りを7周するタワーフと呼ばれる儀式を行う。巡礼に参加しなかった世界中のムスリムが犠牲祭として祝うのがこの日である。巡礼者はこの後、11日から2日間あるいは3日間ミナーに滞在して投石の儀式を行い巡礼の儀式を終える。巡礼を行ったムスリムは、「ハーッジ」という榮譽ある称号で呼ばれることになる。ムスリムは、巡礼月以外もマッカ巡礼を行うことができるが、この巡礼はウムラ（小巡礼）と称される。

(3) イスラーム暦

サウディアラビアをはじめイスラーム諸国の伝統的な暦は太陰暦に基づくイスラーム暦である。サウディアラビアの公式文書には必ずイスラーム暦が記され、それに対応する西暦が併記されている。イスラーム暦は預言者ムハンマドがマッカからマディーナに難を逃れてヒジュラ（移住と言う意味）した西暦622年7月16

日から始まるので、「ヒジュラ暦」とも呼ばれる。1カ月の日数は、新月から次ぎの新月までの期間なので29日間または30日間となり、このためイスラーム暦の1年は通常、西暦より11日少ない354日となっている。断食や巡礼など、イスラームの宗教行事はすべてイスラーム暦に準拠しているため、西暦より毎年11日早く巡ってくる。従って、同じ宗教行事でも夏に来る時もあれば、冬に巡ってくる時もある。イスラーム暦各月のアラビア語の名称は次の通りである。

第1月；ムハッラム、第2月；サファル、第3月；ラビーウ・ル・アウワル、第4月；ラビーウッサーニー、第5月；ジュマーダ・ル・ウーラー、第6月；ジュマーダ・ル・アーヒラ、第7月；ラジャブ、第8月；シャアバーン、第9月；ラマダーン、第10月；シャウワール、第11月；ズ・ル・カアダ、第12月；ズ・ル・ヒッジヤ

(4) 宗教行事と祝祭日

イスラーム諸国は今や国際社会のメンバーとして重要な役割を果たしており、西暦を無視することはできないが、ムスリムの宗教行事はすべてイスラーム暦に準拠している。上述のようにイスラーム暦の1年は太陽暦より11日短いため、ムスリムの重要なつとめである断食の月（ラマダーン）が同一の土地においても冬にあたることもあれば真夏にあたることもある。イスラームの主な宗教行事は次の通りであるが、サウディアラビアの祝祭日は第10月のイード・ル・フィトルと第12月のイード・ル・アドハーのみである。

第1月（ムハッラム）

1日 イスラーム暦元旦。

第3月（ラビーウ・ル・アウワル）

12日 預言者ムハンマドの生誕の日。

第7月（ラジャブ）

27日の夜 預言者ムハンマドがこの日、アッラーに召され天馬に乗ってマッカからエルサレムの聖礼拝殿に夜の旅をし（イスラアという）、ここから天界に昇り（ミアラージュという）一夜のうちにマッカに戻ったという奇跡を記念する夜。



聖モスク（マッカ）

第9月（ラマダーン）

1日～30日 断食の月。ムスリムはこの1カ月間、日の出から日没まで、
一切の飲食を絶つ。

第10月（シャウワール）

1日～3日 イード・ル・フィットルと呼ばれる断食明けの大祭。1カ月の
断食・斎戒を成し遂げたことを祝う大祭。

第12月（ズ・ル・ヒッジヤ）

9日 マッカ巡礼のムスリムがアラファートの地に立つ日で、巡
礼中最も重要な儀式の日。

10日～13日 イード・ル・アドハーと呼ばれる犠牲祭が行われる。